

C03

顎の成長発育に著しい差異が観られた二卵性
双生児への長期処置、管理の1例

○中山隆介

(なかやま歯科・名古屋市)

【目的】

小児歯科では兄弟姉妹を並行して口腔管理する機会も多く、経験的に類似する点が多いことに気付かされる。当院に1歳半より受診している双生児で二卵性ではあるものの、むしろ成長発育に著しい差異があり姉のみ側方拡大するに至った姉妹の経過を報告する。

【対象と方法】

現在12歳となる二卵性双生児の姉妹について現状を研究用模型などの資料をもとに比較し、初診時からの処置履歴とともに考察した。

【結果】

初診時の主訴は姉妹とも前歯の着色であり、その後も乳臼歯隣接面カリエス治療など大きな違いはなかった。しかし姉はHellmanのIIA期にもほとんど歯間空隙がなく6歳7ヶ月時に下顎中切歯が萌出するとスペースの不足による捻転が観られた。9歳5ヶ月時には下顎前歯部の著しい叢生と左右臼歯部のII級咬合、狭小な上下歯列弓幅径などの診断のもと可撤式装置による側方拡大を開始し現在に至っている。一方妹はIIA期に歯間空隙を認め5歳4ヶ月で下顎中切歯萌出開始した際には捻転も認めたが、その後目立った叢生には至らず咬合誘導の必要性も生じていない。

2年7ヶ月装置を使用したことで姉は上下歯列幅径がそれぞれ6.65mmと5.40mm拡大し、歯列幅径長径ともに標準より1SD以上大きい状態だが叢生はまだ残っている。妹は上顎歯列幅径で約1SD大きい以外は歯列の大きさは標準偏差内にあり目だった叢生も観られない。これには歯冠幅径で総じて姉の方が大きいことや妹の右上側切歯が栓状歯であることなども関係している。

今後姉妹それぞれに必要な処置を行っていく予定である。

【考察】

小児歯科医の役割は小児の口腔を総括的および継続的に管理し将来にわたって健全な口腔機能を獲得させることに尽きるが、その際個々の状態に応じて適時、適切な対応が求められる兄弟姉妹といえども予断をもって臨むことがあってはならないと考える。

C04

多数歯齲蝕を有した自閉スペクトラム症患者
の長期にわたる口腔内管理の1例

武内 倫子

日立市心身障害者歯科診療所

【緒言】低年齢児、特に障害を有する小児の歯科治療には、苦慮することが多い。今回、自閉スペクトラム症の初診時年齢2歳10カ月の多発歯齲蝕の患児の齲蝕治療を行い、その後、約15年間、定期的に口腔内管理することにより、永久歯は1歯も齲蝕が発生することなく良好な口腔を保持できている症例について、経過を報告する。尚、本症例に関しては、本人及び保護者に同意を得ている。

【症例】初診時2歳10カ月、男児、自閉スペクトラム症

主訴：虫歯治療をしてほしい。

【治療経過】下顎前歯を含みすべての歯に齲蝕が認められた。乳臼歯部の齲蝕は痛みがありそうなので、抑制下でもいいので、早急に治療を開始してほしいとの保護者の希望もあり、必要に応じて抑制下での治療を行った。水分はジュースしか飲まず、その回数も頻回で、しばらくの間は齲蝕のコントロールができず、2次齲蝕ができ、根管治療が必要になってしまった歯もあった。年齢が上がり、理解度もあがってきたため、系統的脱感作をすすめた。8歳5カ月以降は全ての処置を通法下で行えるようになった。7歳0カ月以降は、新たな齲蝕が発生することもなく、定期健診を継続している。17歳11カ月時に、埋伏智歯4歯を近医にて全身麻酔下で抜歯した。

【考察】初診当初から、ジュース以外の水分は摂取しないという状況が継続していたため、口腔内管理が難しく、一部の歯は、根管治療が必要な状態までになってしまった。聴覚過敏があり、イヤーマフを使用したり、患児の好きなCDを聞きながらできるだけリラックスできる環境を作り、さまざまな器具・機械にも慣れていくことができた。

乳歯では、齲蝕が多発していたにも関わらず、保護者の意識も変化し、永久歯では良好な口腔内を保持できている。今後も定期管理を継続する予定である。